

安積屏拓と地元の大々

安積開拓以前の郡山

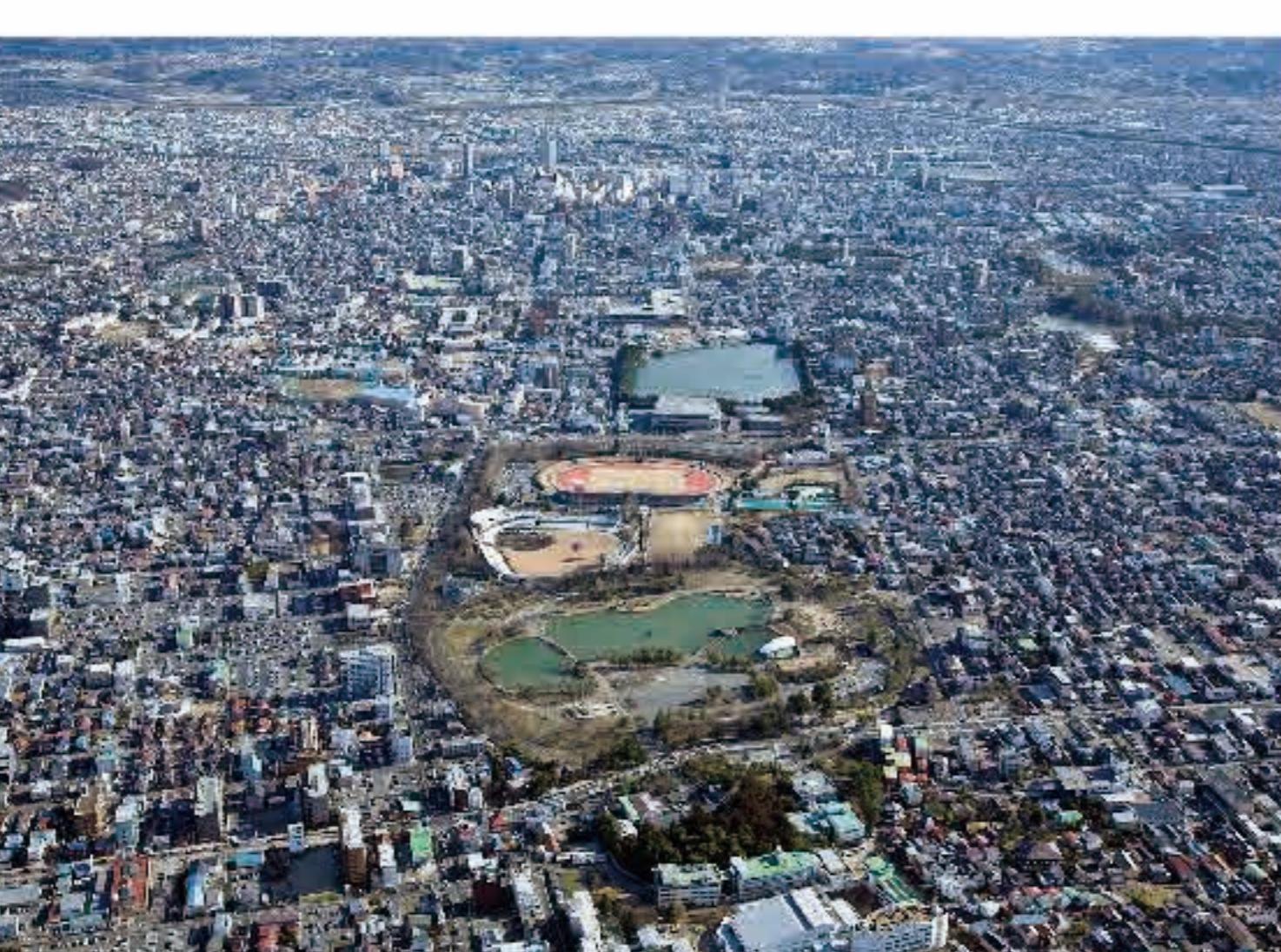
郡山市誕生以前の郡山市域は、各村に分かれており、現在の郡山駅周辺が郡山村であった。寛永20年(1643)に丹羽氏が二本松へ入封して以降、郡山村は二本松藩領であった。奥州街道の宿場町として栄えた郡山村は、文政7年(1824)に町へ昇格した。

慶応4年(1868)より戊辰戦争が始まると、兵火により郡山宿は大きな被害を受けた。戦争により疲弊した郡山の人々は、戦後復興を目指し商業活動を活発化させた。

明治初期の地方行政組織は何度か変更があり、明治22年(1889)に市町村制が交付されて、郡山は町となった。その前は郡山村となっていた。大正13年(1924)に郡山町が小原田村を合併し、郡山市が誕生した。その翌年には桑野村も合併された。



安積三組村絵図(部分)



現在の郡山市
画像提供・郡山市
2009年に撮影したもの



立岩家文書 郡山市歴史資料館蔵
立岩一郎の養嗣子・震作は、後に
桑野村村長を務めた。

開墾事業と地元の人々

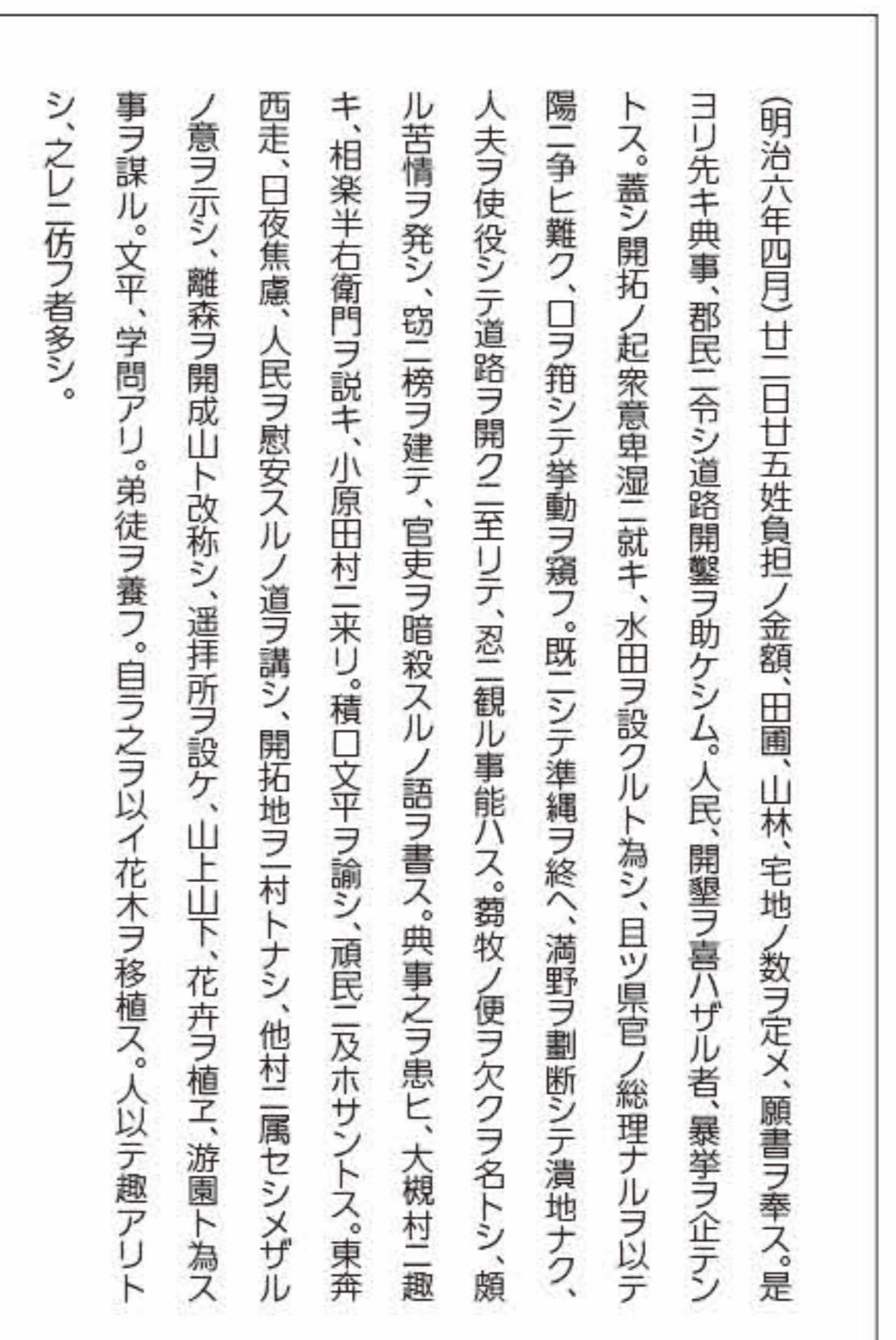
開墾事業が始まると地元の人々にも大きな影響を及ぼした。いち早く入植する者がいれば、開墾事業へ反対する者もいた。

中條は、大槻村上町名主相楽半右衛門などの協力を得ながら、開墾事業を進めていった。



菜根獻納碑
明治天皇行幸60年記念に菜根地内(現在の五百瀬公園)に建立された。

明治天皇巡幸の際に、梅津孫助が大根を献上した出来事が「菜根」の地名の由来となった。梅津孫助は、明治7年に大槻原に入植した。



開成社記録

天晴風静桃翁〔関口桃翁。小原田村旧名主。〕村中ノ老幼數十人ヲ從ヒ來リ、開成山一遊フ。君〔中條政恒〕生徒一菓餅ヲ与ヘ、老人一酒肴ヲシ、且談且酌、陸續再遊ヲ約ス。老幼開成山ノ風色及ヒ満山花ヲ植ユルヲ見テ謂、是亦一樂ナリト。是ヨリ時々群ヲ結ヒ來リ。或ハ紅葉樹ヲ植ルアリ、他ノ花木ヲ栽ユルアリ。於是同村鈴木文次郎、大槻村家久来善左衛門、七海清左衛門等ヲ挙ケテ、事業一助力セシム。人皆曰、是等開拓ノ苦情ヲ唱ヒ、人民ヲ煽動セシ者ナリト。居ル久之同人等、深ク君ノ意ヲ解シ又君力寢食ヲ忘レ非常ニ苦心スルヲ見テ、斷然意ヲ翻シ、野ニ日勤シ、或ハ深夜家ニ歸リ、或ハ原中ニ宿スルヲ以テ常トス。又米噛ヲ齎シ來リテ、公益ニ従事セリ。事業細末ノ事ハ、其力ニ頼ル殊ニ多トス。此時ヤ支給スヘキノ資力ナケレハ、及フ丈ケハ君自費ヲ以テ之レヲ取扱ハレタリ。又々郡中ノ俊ヲ撰ニ、薄井伝之助、鈴木亀右衛門等入ヲ挙テ開拓掛付属トシ、官ヨリ月給四円ヲ給ス。諸氏其薄給ナルヲ厭ハス、大ニ憤發シ、日夜鞅掌ス。旅費等ノ如キハ或ハ白弁スルモノク、或ハ君ノ支給ニヨリ、爾來四、五年ヲ経ルモ猶怠ラス、篤志ト謂フヘシ矣。大槻村ニ相樂半右衛門ト云ヘル老人アリ。文字ヲ好ミ和歌ヲ善ス。宿昔荒野開拓ノ志ヲ抱ク功ナルモ、微力為又能ハサルヲ憾ム。今此挙アルニ及ヒ、大ニ喜ヒ、來リテ君ト交ル。同人、氣節アリ。又、略アリ。國学ニ長ス。田舎中ニハ珍シキ人物ナリ。恒ニ君力為メニ事業ノ進路ヲ画策シテ、残ス所ナシ。後年、君力湖ヲ疏シ、諸原ヲ拓スルノ大業ハ、ク此老人ノ意見ヲ採用セラレタルモノナリト。而シテ「レ上下ノ間ニ居リ、上意ヲ下達シ、下情ヲ上達スル、尤モ其力ヲ極メタリ。故ニ村々情百出中、大槻村独リ鎮靜ナルノミナラス、却テ尽力非常ニ出テ、諸村ノ標準トナルニ至レリ。夫レ大槻村ハ郡中ノ大村ニテ、原野ノ七、ハハ大槻村ノ屬地、加之終ニ八同村ニ支郷ナル、島、龜田ヲ割キ、新村ニ屬セルヲ以テ、同村ノ不利多キハ諸村ノ及フ所ニ非ス。然ルニ、「老人ノト熟力貴ク、熟力賤キ。賤キヲ愛シ、貴キヲ嫌フハ」村ノ為メニ取ラサル所ナリ。今原野中小原田村進退スル所ノ地ニ十七町余、而テ一村ノ口二百余戸、之レヲ一戸ニ配スレハ、一反余タル一週キス。何ソ奮テ之レヲ墾シ、各戸ノ為メニ利益ヲカメサルヤト。村民曰ク、請フ従事セント。是ニ十七町余ヲ挙ケ、長沼文次郎ヲシテ小原田村民ニ付セシメ、其開墾ヲ督ス。時月ヲ費サヌシテ良地トナレリ(著者聞ク、中條君ノ小原田臨ニ、開拓ヲ人民ニ説キタルハ、明治六年四月十九日ナリ。後年小原田村民、中條君ヲ慕ヒ、此月此日ヲ以テ毎年村内ニ記念会ヲ開キ、其遺セラレ、種々謀ル所アリ。遂ニ全郡人ヲ獎励シ、原中大路線ヲ開カシム。全郡皆応ス。日々來リテ役ニ就クモノ幾百人。役夫、蟻ノ如シ。南ノ東ニ通スル者、又折レテ南シ針生ニ至ルモノ、及ヒ開成山下ヨリ北向スルモノ、数条ノ大道、亦半月ヲ出テスシテ見ルヘキモノアリ。是此囃中ニ道路ヲ開クノ濫觴トス。

大槻原開墾－「開成社」の結社

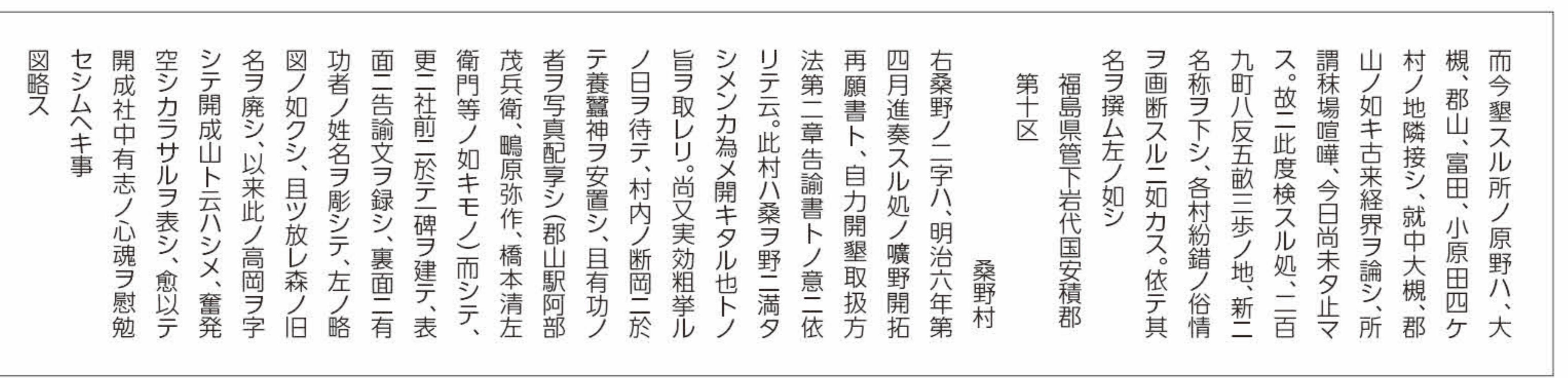
福島県は、旧二本松藩士族や一般農民の入植の他に、郡山の商人に開墾事業への参加を呼びかけた。開墾地を得るために出資が必要であることから、最終的に25名の商人が出資を決め、「開成社」を結成した。

資金を出し、小作人による開墾事業を行う開成社のケースは、福島県の開墾事業のうち、「自力開墾」である。

旧福島県は、養蚕業を軸とした開墾事業が想定され、桑が植えられた。開成社は、入植者の食の確保のためにも水田が必要であると主張し、開成社では水田を造った。用水の確保のため、用水池築造工事が行なわれ、明治7年(1874)1月5日に開成沼(現在の開成山野球場と陸上競技場)が完成した。また、開成社では、堤の土手などに花木を植樹し、これが現在の開成山公園の桜となっている。



開成山より開成沼眺望の図
宮内庁三の丸尚蔵館蔵(福島県管下安積郡桑野村開成山より開成沼眺望の図)



福島県開墾志
「福島県開墾志」より抜粋。原文の細字2行の箇所は()内に入れて1行とした。句読点を加えた。



開成社員
明治天皇行幸の際に洋装姿で拝謁した。